

## ルーミーの思想を読み解く『精神的マスナヴィー』の説話が描く世界

報告 佐々木あや乃

二〇一八年度末、科学研究費(基盤研究(C))「ペルシア語神秘主義詩人ルーミーのマスナヴィー(叙事詩)に関する基礎的研究」によるプロジェクトの活動の一環として、総合文化研究所の協力のもと、標記のペルシア文学講演会を開催した。これは、同年度内に既に実施した二つのペルシア文学、とりわけルーミー研究に関する講演会を締めくくる好機となった。

ペルシア神秘主義詩人ルーミーの『精神的マスナヴィー』という神秘主義文学の大著は、原語では、*mahnavī-ye ma'navī*と称される。*ma'navī*という語に「神秘主義的直観に基づく」、「神秘的体験において開示される實在の真相に淵源する」といった意味があることからわかるように、この作品には神秘家としてのルーミーの实在体験が反映されている。ルーミーの凝縮された神秘主義思想を語るべく用いられた数多の逸話の中で、特に「イブラーヒーム伝説」に焦点を当てたのが、シャキービー氏による本講演であった。

イブラーヒームとは勿論旧約聖書のアブラハムを指す場合もないわけではないが、ルーミーの作品内では、イブラーヒーム・アドハム(七七七七/七八二)という、イスラーム初期の禁欲家、高名な神秘家である場合が大半である。バルフ(現在のアフガニスタン西北部の町)の王族であったにもかかわらず、

ある日城を抜け出し初めて目にした貧困や病、死をきつかけに神への帰依に覚醒し、王位や財産を棄てバグダードへ出奔、イラクやシリア、ヘジャーズを巡り、学識を身につけたといわれる彼の生涯は、我々にブツダを想起させる。イブラーヒームの生地バルフや、タリバンに大仏を破壊されたことで一気に知名度が上がったバーミヤンにも仏教徒が多く住んでいたことから推察できるように、イブラーヒームとブツダの共通点は単なる偶然ではないのかもしれない。

講演者シャキービー氏が本講演で紹介したのは、イブラーヒーム・アドハムが登場する二つの象徴物語である。一つは、貧しい身なりで浜辺で針仕事をするイブラーヒームを見た王に気づき、イブラーヒームが針を海に投げ入れると、魚たちが金の針をくわえて波間に顔を出すという話である。イブラーヒームは王に「心を支配するのがよいか、それともこの世を支配するのがよいか」と問いかける。ペルシア神秘主義文学では、魚は神に辿り着くことを目指す修行者、海は神の象徴である。いま一つの逸話は、夜イブラーヒームが寝ていると屋根裏で音がするので何事かと問うと、「ラクダを探している」との返答。屋根にラクダがいるものかと答えると、「あなたは王座も地位もあるのに、神との邂逅を望んでいるではないか」と言われて

